

震災を乗り越えて 有機化成と土改材で良質米「つや姫」栽培



2011年3月11日。東日本の太平洋沿岸を大津波が襲いました。その土地で、復興に向けて力強く歩みを進める高橋さん親子を、今回は取材させて頂きました。高橋さん親子は、水稻30ヘクタールを栽培する生産者ですが、未だ20ヘクタール近くが震災の影響で耕作できない状況です。しかし、前向きに良質米の栽培に取り組んでおられます。今回は使用されている資材の特徴や、将来の夢について伺いました。



■良質米「つや姫」

「今、栽培しているのは、ひとめぼれ9ヘクタール、つや姫2・5ヘクタール、みやこがねもち0・5ヘクタール。」
父親の一夫さんは中学2年の時に父様を亡くされ、27歳の時に現在の規模まで拡大されました。
「つや姫を始めたのは二年前。倒伏しにくいし、収穫時期がひとめぼれより二週間ほど遅い。作業分散が出て都合がいい。」
そしてつや姫の食味を絶賛されています。
「これは全然違う。完全に食味が良い。冷めても固くならないし、おにぎりにしたら最高だ。」

■良質米栽培のために 有機化成と土改材を駆使

「つや姫は特別栽培だから、元肥には『有機アミノ020』を使っている。」
この肥料は、有機態チッソが52%含有されている、特別栽培用に作られた有機化成肥料です。
「土改材は『ひとふりA（エース）』を使っている。冷害対策として使い始めた。もう15年になる。今ではすべての田んぼで使っている。」



収穫間もない「つや姫」。

■全てがガレキに覆われ... 不安に苛まれた春

「この田んぼまで津波が来ました。その後はガレキが物凄くて。作付出来る状態ではありませんでした。」
息子の良則さんは就農四年目の春、震災を経験されました。
「その年は7ヘクタールだけ栽培することが出来ました。それ以外はまた作ることに出来たようになると分ならず、本当に心配でした。」
高橋さん一家が栽培されている圃場の三分の二以上が津波の被害を受けました。



ここから見える風景すべてが津波に呑み込まれたそうです。

「うちは機械などは被害に合わなかった。すぐに始めることが出来なかった。早くから栽培出来た圃場は水路式で、バルブ式の圃場は整備に時間がかかった。震災の翌年から徐々に栽培出来るようになっていきます。残り18ヘクタールも来年から作付出来る予定です。」
撮影した圃場のすぐそばで、重機による圃場整備が行われていました。
津波の被害を受けた圃場も、震災翌年には少しずつ作付が出来るようになっていました。
何度も放映された大津波や、ガレキの山の映像を思い浮かべると、その復活の速さに驚かされました。



イチゴの産地だったこの地域では、新しいハウスが建てられています。

■次につなげる!! さらに拡大して!!

「21歳で農業を始め、今年で七年目です。今は仕事も覚え、楽しく感じました。」
良則さんは会社員から農業に転向されました。
「ここまで規模を大きくして良かった。始め、次につないでいければいい。私も楽しかったです。特に収穫には喜びがあります。」
規模拡大も考えておられます。
「最低でも50ヘクタールはやりたい。法人化も考えています。機械化も進んでいるし、やれると思います。」
押寄せる真つ黒な波、ガレキに覆い尽くされた田んぼ。そんな経験を乗り越え、さらに規模を拡大する。
この力強さ!必ず成功させてください。応援しています。



■編集後記
震災時の状況を、高橋さん家族は淡々と語ってくれました。私は震え上がりました。枯れあがった松並木、その松すら根こそぎなくなってしまった海岸線。そんな風景の中、皆さんの笑顔がとても強く心に残りました。東北の人は強い。本当にそう感じさせられた取材でした。